国際仏教学大学院大学研究紀要
第 27 号（令和 5 年）

Journal of the International College
for Postgraduate Buddhist Studies
Vol. XXVII, 2023

Kumāralāta 作 Jātaka/Avadāna 集の トカラ語 A 訳の構成と特徴

幅　田　裕　美

Kumāralāta 作 Jātaka/Avadāna 集の トカラ語 A 訳の構成と特徴

幅田　裕美

1. はじめに

トカラ語 A で伝わる Jātaka/Avadāna 集の写本の断片に Kumāralāta の名前が書かれており、この説話集の作者である可能性が高いことを、昨年度の紀要で紹介した[1]。この説話集（以下『Kumāralāta 説話集』と仮に略称）は Emil Sieg と Wilhelm Siegling によるトカラ語 A 断片の分類で A1 から A53 の番号を与えられた写本で、新しい分類記号の THT 634–686 に対応する[2]。Šorčuq 出土[3]のこの写本のうち A1–25 は最も断片の保存状態が良く、ほぼ全体のテキストが残っており、トカラ語研究の主要資料として知られてきた[4]。残りの A26–53 は損傷の大きな断片で、一葉のごく一部分のもの、比較的よく残っている断片でも数文字程度の幅で一葉の上下の端を含んでいる程度のものである。裏の左端に書かれた葉番号を含む断片が比較的よく残っており、さらに綴じ穴の脇に二次的に葉番号が書き込まれていることから、断片の順序をある程度知ることができる。ただし、この後代の葉番号は写本の途中からずれが生じている。保存さ

---

[1] 幅田 [2022]. Kumāralāta については加藤 [1989], pp. 37–52 参照。

[2] Sieg & Siegling [1921], pp. 1–30. トカラ語のデータベース CEToM (A Comprehensive Edition of Tocharian Manuscripts, https://www.univie.ac.at/tocharian/ または https://cetom.univie.ac.at/tocharian/)にも修正を加えた transcription と英訳が収録されている。

[3] 出土地 Šorčuq の“Stadthöhle” (“Nāgarājahöhle”)については Grünwedel [1912], p. 206, Höhle 9 参照。

[4] Sieg [1944], pp. 3–30 に A1–25 のドイツ語訳がある。

れている最も大きな葉番号は 121 であり[5]、大部のテキストであったことが窺われる。

以上のような断片の状態からテキストの全体像を知るのは非常に困難であるが、どんなに小さな断片でも貴重な情報を残しているのは言うまでもない。筆者はその僅かな情報からこの説話集の概要を把握することを試みているが、本稿は、断片から見出されることを中間報告として紹介することとしたい。

2. 説話集のタイトルとスタイル

上述のとおり保存状態の良い断片に A1–25 の番号が付されたが、この写本の最初のフォリオは A26 である。続く A27 の葉番号の 2 が残っているので、この写本の第一葉がテキストの始まりであることが知られる[6]。テキストのタイトルが書かれていたと考えられる A26 の表は損傷が激しく、Sieg & Siegling [1921]が僅かに po の文字を読み取っているのみである[7]。このシラブル po はサンスクリット語の sarva の訳、トカラ語 A の pont- の何らかの形である可能性があるが、確実なことはわからない。説話集の作者と考えられる Kumāralāta の名前は A32 に現われ、章の終わりで Kumāralāta の形容詞形[8]がテキスト名とともに書かれていたと想定されるが、この形容詞の前後で断片が損傷して失われているため、テキスト名は不明である。

写本の第一葉の裏にはテキストの冒頭の偈文、おそらく帰敬偈が書か

---

[5] Sieg & Siegling [1921], p. 26 参照。断片 A43 の裏に葉番号 121 があり、綴じ穴の脇には後代の手で 110 と書かれている。

[6] Sieg & Siegling [1921], p. 20 参照。

[7] “Die Vorderseite enthielt den Titel, von dem nur die Silbe *po* (oder *ṣo*?) undeutlich zu lesen ist.” (Sieg & Siegling [1921], p. 20).

[8] 裏 3 行目の行頭で ṣ kumāralāṭeṃ /// (A32b3). Kumāralāta の形容詞形が著作のタイトルとともに用いられる例は、Kalpanāmaṇḍitikā の第 30 話および第 60 話の終わりにもみられる。(āryakau)māralā(tāyāṃ) .. kalpanāmaṇḍitikā(yāṃ) … paṅktyāṃ tritīyā daśa(tī samāptā 3 ‖), KalpM *111V3–4; (ity ā)ryakaumāralātāyāṃ kalpanālaṃk(ṛt)i(kāyāṃ) … (ṣaṣṭhī da)śatī samāptā 6 ‖), KalpM *192V2–3.

れていたと考えられ、関係代名詞の後に koṭi の複数具格(korisyo, A26b1)、abhiṣeka の音訳(abhiṣek, A26b2)と dharma に対応するトカラ語 märkampal の部分(märka/// A26b2)、「Buddha の威厳」を表すトカラ語 puttiśparäṃ の部分(puttiśpa/// A26b3)が書かれていることから、Buddha の過去世の長い期間にわたる偉業が讃えられていることが想定される。Jātaka/Avadāna 集の冒頭を飾るのにふさわしい帰敬偈と言えよう。

第二葉の A27 の表の 1 行目は欠落しており、2 行目も損傷が激しい。3 行目は行頭のダブルダンダに続いて「それは（以下の）ように聞き伝えられている」(täm mäṃtne klyosnäṣträ, A27a3)とあり、ここから最初の物語が始まるとみなされる。物語の冒頭にこのような表現を用いるのは、Kumāralāta 作 Kalpanāmaṇḍitikā や Āryaśūras 作 Jātakamālā などで知られているスタイルであり[9]、トカラ語の täm mäṃtne klyosnäṣträ はサンスクリット語の tadyathānuśrūyate の翻訳である可能性が高い。同じ物語を素材としながら比較的後代に編集されたと考えられる Divyāvadāna ではこのようなスタイルは用いられない。この tadyathānuśrūyate の前には物語の主題が述べられるが、これについては次項で検討する。

物語は韻文と散文が交替するスタイル、いわゆる campū スタイルと呼ばれる kāvya の技巧で書かれている[10]。Kumāralāta より時代が古いと考えられる Aśvaghoṣa の Buddhacarita などの作品は韻文のみで書かれたスタイルで伝承されており、仏教文学の初期のスタイルの発展を示す特徴として知られている。Kalpanāmaṇḍitikā もこの campū スタイルで書かれており、断片に残っているテキストによる限り、韻文は主に登場人物の発話文に

---

[9] Lüders [1926], p. 47. Kalpanāmaṇḍitikā に対応する漢訳『大荘厳論経/大荘厳経論』（Taishō, vol. 4, no. 201）では「我昔曾聞」が tadyathānuśrūyate に相当する。『大荘厳論経』の作者は「馬鳴」とされているが、Kalpanāmaṇḍitikā の作者が Kumāralāta であることから、Lüders [1926]の発見以降、作者問題について議論されてきた。その議論の概要は Hahn [1982], pp. 309–311 を参照されたい。本稿では作者問題には立ち入らず、断片的な Kalpanāmaṇḍitikā のテキストを補足する文献として扱う。

[10] campū スタイルについては Hahn [1992], p. 4 および Chojnacki [2008], pp. 155–161 参照。

用いられていることが Lüders により指摘されている。Lüders はさらに、Āryaśūras の Jātakamālā の campū スタイルと比較して、Kalpanāmaṇḍitikā が韻文の前に「言った」(uvāca, abravīt, kathayāmāsa, prāha)や「なぜならば」(vakṣyati hi, vakṣyati ca)という導入表現を用いるのに対して、Jātakamālā では韻文は発話文に限らず、物語の説明文でも韻文と散文が導入表現を伴わずに自由に交替して用いられているところに kāvya スタイルの発展的特徴を認めている[11]。『Kumāralāta 説話集』では、発話文と説明文の両方で韻文が用いられているが、韻文の前に発話の始まり、理由説明の始まり、あるいは韻文の始まりの導入表現のある場合が認められる一方[12]、導入なしに自由に韻文と散文が交替する場合もある。前者は Kalpanāmaṇḍitikā の用法に近いが、後者は Jātakamālā の用法に近く、両者の中間的あるいは過渡的なスタイルと言えようか。

3. 説話集の構成

Kumāralāta の名前が書かれている断片 A32 の葉番号は 32 であり、章の終わりのコロフォンと考えられる。一方、保存状態の良い A1–25 の葉番号は A1 が 65 であり、葉番号は A13 の 77 までしか残っていないが、テキストは A25 まで連続しているとみなされるので、A25 の葉番号は 89 となる。この A1–25 すなわち第 65 葉から第 89 葉までの間に章区分はないので、一つの章は比較的長いテキストからなっていたことが推測される。一つの章は同じ主題でいくつかの物語が続けて説かれ、さらに個々の物語の中に経典が引用され、他の説話が組み込まれ、仏教教義を盛り込んで文学作品として仕上げられている。例えば A1–25 は puṇya を主題

[11] Lüders [1926], pp. 47–51.

[12] 例えば「言う」träṅkäṣ (A9b3)、「偈に言う」(ṣ)l(y)o(k) (trä)ṅkäṣ (A16b2–3)、「なぜなら」kyalte (A2b1, A13b1)、「どのようにか」täm nu mänt wäknā, (A5b2, A8a4)、阿含の引用の前に「偉大な師によって次のように言われた」śāwes käṣṣiśśi taṃne wewñu (A3a2)などの用例がある。

として編集された章の一部とみなされる[13]。

物語ないし章の主題は、前項で述べたように、tadyathānuśrūyate の定形句で物語が始まる前に挙げられる。この定形句の翻訳とみなされるトカラ語 täm mäṃtne klyosnäṣträ は第 2 葉(A27)の表 3 行目にあるが、その前の行は損傷が激しく、僅かに「量」「限度」を意味する mem と yärm が読み取られるのみである。A27 の物語は、dharmarājika[14]の音訳の部分(dharmarā/// A27b2)、「舎利」の音訳の複数形(śarirntu, A27b3)が読み取られ、「装飾」(yetwe wampe, A27a4; wampe yetwe, A27a5)、「Indra の宮殿(vaijayanta)のようである」(oki vaijayant, A27a6)という表現がみられることから、仏塔を荘厳する功徳が語られていると推測される。裏 4 行目の badhe を Bandhuma の音訳と解釈することが可能であれば[15]、過去仏 Vipaśyin 仏の時に、Vipaśyin 仏の舎利をもって仏塔を起こした Bandhumatī 城の国王の業績が讃えられていると想定される。仏塔を荘厳し供養する功徳は説話の素材としてしばしばとりあげられるものであり、dharmarājika の語は A49b1 にも現れる。この断片 A49 の葉番号は残っていないが、仏塔の荘厳や供養の物語を集めた第一章に含まれていた可能性が考えられる。この断片 A49 は Kaniṣka 王の名前を挙げ(A49a4, b5)、Puṣyamitra 王[16]によって破壊された僧院(A49a5)に言及することから、Kaniṣka 王による仏教僧院の再建を物語っているのは確実であろう。Kaniṣka 王は Kalpanāmaṇḍitikā でも言及されるが、これについては次項で取り上げることとしたい。仏

---

[13] A32 および A1–25 についての詳細は幅田 [2022]を参照されたい。

[14] 「法の王に属する」すなわち「仏塔」の意味で用いられる。BHSD s.v. dharmarājikā 参照。

[15] bandhu-の鼻音-n-の脱落と接尾辞-ma/-mat の省略を考慮する必要がある。漢訳の音写には省略形の「盤頭」「旃頭」の用例がある（IKJ s.v. Bandhumatā, Bandhumā 参照）。トカラ語のデータベース CEToM (A Comprehensive Edition of Tocharian Manuscripts, https://www.univie.ac.at/tocharian/?m-a27)では他の解釈の可能性を指摘している（2022 年 4 月 10 日閲覧）。

[16] Maurya 王朝の最後の王を殺害し、Śuṅga 王朝を創立した Puṣyamitra は、仏典では仏教の破壊者として知られ、例えば Divyāvadāna に収録されている第 29 話 Aśokāvadāna に登場する。歴史的には必ずしも仏教の破壊者ではなかったであろうことが Kulke & Rothermund [1998], pp. 91–92 で指摘されている。

塔の荘厳や供養の物語のテーマは Kalpanāmaṇḍitikā の第 1 話および第 31 話が参考になろう。第 1 話はチベット語訳のパラレルが伝えられており、それによると「供養に値するものと供養に値しないものとを理解し、善徳と悪徳の特徴を根本的に把握するために、大いに努力するべきである」[17]がテーマとして述べられる。Kalpanāmaṇḍitikā の第 1 話の冒頭はサンスクリット断片に残っていないが、第 31 話の冒頭は断片的に残っており、「供養に値するもの」が pūjāsahiṣṇutva であったことが知られる[18]。このような仏塔供養をテーマとして、『Kumāralāta 説話集』の第一章が始まっていると考えられるが、この第一章がどこまで続いているかは不明であり、今後さらに断片を検討する必要がある。

本項の冒頭に述べた章のコロフォンを示すとみなされる A32 で、第何章かは不明であるが、新たな章が始まると考えられる。この断片 A32 に続く A33 以降は葉番号が比較的よく残っている。すなわち、第 33 葉(A33)から第 36 葉(A36)、第 38 葉(A37)、第 39 葉(A38)、第 42 葉(A39)、第 44 葉(A40)から第 46 葉(A42)の断片によって、物語の順序をある程度まで把握することができる。このうち第 38 葉(A37)には「Kṛkin 王は yojana の大きさの」という文面が読み取られる(kṛki wäl kursär tsopatsäṃ ///　A37a2)。Kṛkin 王は過去仏 Kāśyapa 仏の時の王で、この王のエピソードは様々な仏典で言及されるが[19]、そのうち Divyāvadāna 第 1 話 Koṭikarṇāvadāna においては主人公 Śroṇa Koṭikarṇa の過去世物語に登場する。Śroṇa Koṭikarṇa は商船で漂着した島で冥界に迷い込み、死者に遭遇するが、その死者のひとりの肉屋は生前に動物を殺した報いを受けて冥界で苦しみ、後悔する。

---

[17] mchod par bya ba dang / mcod par bya ba ma yin pa rtogs par ’gyur bas yon tan dang skyon gyi mtshan nyid khong du chud pa la rab tu ’bad par bya’o / (Hahn [1982], p. 321, チベット語の transcription は Wylie 方式に改めた)。対応する漢訳は「可歸不可歸　可供不可供　於中善惡相　宜應分別説」(Taishō, vol. 4, no. 201, 257a17–18).

[18] pūjāsahiṣṇutvād api bha … ma … yate, KalpM *111V4–5. 対応する漢訳は「復次有實功德堪受供養。無實功德不堪受人信心供養。」(Taishō, vol. 4, no. 201, 287a21–22).

[19] BHSD s.v. kṛkin; IKJ s.v. Kiki 参照。

これに対応する表現がトカラ語断片の第39葉(A38)と一致することから[20]、この A37 と A38 は Śroṇa Koṭikarṇa の説話である可能性が高い[21]。この Śroṇa Koṭikarṇa の物語は Divyāvadāna、『十誦律』、『根本説一切有部毘奈耶皮革事』、『大荘厳論経』など、有部系の文献をはじめ広く中央アジアで伝承されていた説話で、別のトカラ語 A のヴァージョン(A340–341)も知られており、キジルの壁画にも描かれている[22]。このトカラ語 A340–341 のテキストは、『Kumāralāta 説話集』の出土地と同じ Šorčuq の Stadthöhle から発掘された断片で、『十誦律』のヴァージョンと物語の内容が近いことが指摘されているが[23]、A340–341 はテキスト全体が韻文で書かれているのに対し、『十誦律』は散文で書かれている。先に述べたように『Kumāralāta 説話集』は散文と韻文の交替する campū スタイルで書かれており、いずれも異なったヴァージョンであることが知られる。ヴァージョンによって Śroṇa Koṭikarṇa の冥界彷徨譚に加えて、Kātyāyana の不殺生教示譚、過去世物語、帰還後の出家、皮革法の提案など、いくつかの説話素材が組み合わされているが、『大荘厳論経』の第 18 話は Śroṇa Koṭikarṇa の冥界彷徨譚のみの短いヴァージョンである[24]。『Kumāralāta 説話集』のヴァージョンは不殺生教示譚や過去世物語などを含んでいると想定されるが、詳細については他稿に譲ることとしたい。

---

20 「日中には羊を殺して肉を（売り）」ykonā säm śośkoṣā śwāl, A38a2; 「後悔した」(o)nmiṃ ypāt A38a5.

21 テキストの解読の詳細はミュンヘン大学の Olav Hackstein 教授と共同で準備中である。

22 『十誦律』(Taishō, vol. 23, no. 1435, 178a20–182a21); 『根本説一切有部毘奈耶皮革事 』(Taishō, vol. 23, no. 1447, 1048c7-1053c5); 『大荘厳論経』第 18 話 (Taishō, vol. 4, no. 201, 275c12–276b28). 『大智度論』 (Taishō, vol. 25, no. 1509, 301b13–15)および『大毘婆沙論』 (Taishō, vol. 27, no. 1545, 153c4–154a1; 647c11–648a11)にも言及される。キジルの壁画も含めた各ヴァージョンの比較研究は Waldschmidt [1952]および井ノ口 [1961]参照。Divyāvadāna 第 1 話のパラレル文献は平岡 [2007], p. 31 にも挙げられている。トカラ語 A340–341 のヴァージョンは Sieg [1952], pp. 37–41 にドイツ語訳されている。

23 前掲注 22 で挙げた Waldschmidt [1952]; 井ノ口 [1961]参照。

24 Kalpanāmaṇḍitikā の断片には第 18 話は残存していない。

第 38 葉(A37)と第 39 葉(A38)の後、第 40 葉と第 41 葉は残存していないが、第 42 葉(A39)で説話の教義的な解釈がみられるので、Śroṇa Koṭikarṇa の説話はこの前で終わっていると想定される。この第 42 葉には、「業が原因となる。悪（業）は…」[25] という文面が残されており、「果報」の語(oko, A39a3)もみられることから、説話のテーマが「業と果報」であったことが想定される。これは Divyāvadāna 第 1 話が業報思想をテーマにしているのと一致しているが[26]、『大荘厳論経』の第 18 話のテーマ「不放逸」とは異なる[27]。Śroṇa Koṭikarṇa が冥界で会う死者は、生前に殺生をした者、邪淫を犯した者、盗みを働いた者などが、その悪業に応じて冥界で苦楽の報いを受けるが、死者は飢えと渇きに悩まされる餓鬼として描写される。第 42 葉(A39)の教義的な解釈の後、第 44 葉(A40)から第 46 葉(A42)、および葉番号の残っていない A44–46[28]にも餓鬼(Preta)が登場することから、同じ業報思想を主題として、Preta の説話が続くと考えられる。A46 の本来の葉番号は失われているが、綴じ穴の脇に後代の手で書かれた葉番号は 53 である[29]。

次に葉番号が残っているのは第 65 葉(A1)であり、保存状態の良い第 65 葉(A1)から第 89 葉(A25)を含む章が puṇya を主題として語られる。第 65 葉(A1)は Puṇyavanta の説話の途中からであり、この puṇya を主題とする章はこの葉以前に既に始まっている。先に述べたように、物語に阿含の引用や他の物語を次々と組み込む技法で書かれているため、一つの章は比較的長いテキストであったことが想定される。したがって、業報思想

---

[25] yāmlune ṣrum : 3 omäs[k]e, A39a1. 韻文中の数字は偈文に与えられた番号を示す。

[26] 平岡 [2007], p. 1 参照。

[27] 復次示放逸果。欲令衆生不放逸故 (Taishō, vol. 4, no. 201, 275c12).

[28] CEToM によると A44 は A42 に続く葉であり、A40–42, A44–46 の節を “Pretas and drought”と名づけている。

[29] 本稿の冒頭に述べたように、本来の葉番号と二次的な葉番号は途中からずれが生じているが、第 36 葉(A36)ではまだ一致している。第 121 葉(A43)では綴じ穴の脇に 110 と、本来の葉番号より 11 足りない数字が書き込まれている。A46 の二次的な葉番号にすでにずれが生じていたかどうかは不明である。

を説く章に属すると考えられる第 53(?)葉(A46)と、puṇya を主題とする章が既に始まっている第 65 葉(A1)の間に、他の章が入る余地はないと推測される。

葉番号が百以上になる断片は二葉しか残っていない。第 121 葉(A43+A52) [30]と、綴じ穴の脇の二次的な葉番号の百桁のみ読み取ることができる A48[31]の断片である。Bṛhaddyuti の説話が途中で終わる第 89 葉(A25)とかなり隔たりがあるので、新たな章に属するかもしれないが、断片が僅かなため、確実なことは不明とせざるを得ない。

4. 説話集の素材の特徴 — Kalpanāmaṇḍitikā との比較

『Kumāralāta 説話集』が韻文と散文の交替する campū スタイルで書かれており、この kāvya の技法が同じ著者による Kalpanāmaṇḍitikā と共通していながら、若干の発展した用法を示していることは本稿の第 2 項で分析した。本項では、説話の素材の特徴について Kalpanāmaṇḍitikā と比較しながら、その若干例を取り上げて検討したい。

断片の保存状態の良い A1–19 のテキストが Mahāvastu などのパラレルから知られる Puṇyavantajātaka の枠物語に、経典の引用や他の物語を組み込み、仏教教義を盛り込んで文学作品として仕上げられていることは、幅田 [2022]で詳しく紹介した。そこに組み込まれた経典や説話は多岐にわたるが、そのうち「機械仕掛けの少女の説話」は、その素朴な、すなわち文学化も仏教化もされていない物語のみのヴァージョンが『根本説一切有部毘奈耶藥事』[32]、『雑譬喩経』第 8 話に収録されており[33]、物語の

---

[30] Siegling が A43 と A52 が同一葉に属することを自著に書き込み、物語を“den von den Meer-Wesen gestohlenen Cintāmaṇi erhält der Bodhisattva zurück, da er das Meer auszuschöpfen droht mit seiner Schildkrötenschale”と解説している。Siegling の書き込みについては CEToM の A43 と A52 の philological commentary に紹介されている。

[31] CEToM の A48 の説明による。

[32] Taishō vol. 24, no. 1448, 77a23–b18, サンスクリット語テキストは GM vol. III, part 1, 166.9–168.5, チベット語訳テキストは Hofinger [1954], pp. 38–40, 和訳

枠組みは異なるが、Puṇyavantajātaka の別ヴァージョンである『生經』第 24 話「國王五人經」では「機械仕掛けの少女」が「機關木人」として登場する[34]。

この「機械仕掛けの少女」のモチーフは Kalpanāmaṇḍitikā の第 29 話にも現れる。サンスクリットのテキストが断片的に残っており、対応する『大荘厳論経』も参照すると、次のような物語である[35]。ある幻術師(māyākāra)が僧団に食事を供養しようとした際に、ある木材(śevālalatā)を使って機械仕掛けの美しい少女を作る[36]。幻術師はその少女と戯れてキスしたり抱きしめたりする。比丘たちはこれに嫌悪をもよおし、このような恥知らずで猥雑なことをする幻術師からは供養を受けない、と怒る。これを聞いた幻術師は、今度はその少女を刀で切ってバラバラにする。比丘たちはますます怒って、こんな者から供養を受けるくらいなら毒を飲んだ方がましだ、と言う。幻術師は「比丘たちは、私が少女を愛するのを見ると怒る。少女への愛欲を断って殺すとまた腹を立てる。さて、どうしたものかな」と言う。戸惑う比丘たちに、幻術師は種を明かして、少女を作った木材を見せ、次のように言う。「私はこの木材を操っていただけで、この木材に愛欲だの殺人だのあろうはずがない。私はただ、僧団の方々の身を案じて食物を供しようとし、心を案じて幻術をお見せしようとしただけだ」。ここで幻術師は、「すべての現象は幻のごとし」[37]と

は八尾 [2013], pp. 459 参照。

[33] Taishō vol. 4, no. 207, 523c29–524a19.

[34] Taishō vol. 3, no. 154, 87b26–27; 88a17–b11.

[35] KalpM *105–*106 (SHT 21/33–34); Taishō vol. 4, no. 201, 285a3–c5.

[36] /// saṃghabhaktam akarot sa bh .. .. ..u bhikṣuṣu śevālalatām ād(āya) /// KalpM *105V2; 有一幻師有信樂心至晝闇山。爲僧設食供養已訖。幻尸陀羅木作一女人端正奇特 (Taishō vol. 4, no. 201, 285a4–6). 「機械仕掛けの少女」のサンスクリット語は断片に残っていないが、木から作った女人が機械仕掛けであることは「幻師運轉機關。令其視眴俯仰顧眄。行歩進止或語或笑」(Taishō vol. 4, no. 201, 285a24–25)に明らかである。

[37] 佛於修多羅中説一切法猶如幻化 (Taishō vol. 4, no. 201, 285a21–22). サンスクリット文は断片に残っていない。この引用は Huber [1908], p. 148 および Lévi [1908], p. 107 でも特定の経典に比定されていない。『雑阿含経』第 265 経（第十

いう経典を引用して、この仏陀の言葉を実証するために、幻の少女を作ったのであるが、その幻の身体には命がなく、幻術師に操られて動いたり話したり笑ったりする。このことによって、我々の身体も真実には無我であると知るのであると説明する。

機械仕掛けの少女を本物の少女と思い込んで、それに対して様々な感情を抱いた後に、それがただの木材であることがわかり、このことを無我の教えと関連づけるのは、『Kumāralāta 説話集』の「機械仕掛けの少女の説話」でもみられる手法である。機械仕掛けの少女を本物と思って恋愛の情に悩まされた絵師は、少女の手をつかんだ途端バラバラになった木切れを見て、自分の愚かさに恥入り、「自己はない。人間に自己という想いが作られたのだ。」と思索する[38]。

説話の素材が仏典のみではなく、広くインド文学から取り入れられていることは『Kumāralāta 説話集』の Puṇyavanta の説話に顕著にみられる。例えば「Rāma の物語」(A10a2–A11a6)は Rāmāyana から、「獅子作りの物語」(A11a6–A13a5)は Pañcatantra から知られている説話である[39]。Kalpanāmaṇḍitikā の作者もインド文学に親しんでいたであろうことは、例えば第 24 話で Rāmāyana や Mahābhārata に言及することから知られる[40]。kāvya 文学者としてインド文学の素養があることは当然だったのかもし

巻第 10 経）「泡沫」(Taishō vol. 2, no. 99, 68b29–69b3)において幻師の譬喩 (69a7–11)の後に「諸識法如幻」(69a20)と説かれるのが参考になろう。しかし「幻のごとし」とされているのは「一切法」ではなく「諸識」である。安世高訳『五陰譬喩経』の「夫幻喩如識」(Taishō vol. 2, no. 105, 501b20)および竺曇無蘭訳『水沫所漂経』の「識如彼幻術」(Taishō vol. 2, no. 106, 502a28)も同様に「識」を「幻のごとし」とする。対応するパーリ経典の表現は māyūpamañca viññāṇaṃ (SN III 142.31)である。

38 この物語の詳細および無我の教えの背景については幅田 [2022]を参照されたい。

39 「Rāma の物語」については Dschi [1943], pp, 286–287, 「獅子作りの物語」については Sieg [1916]参照。

40 Rāmāyana と Mahābhārata の書名が それぞれ「羅摩延書」「婆羅他書」(Taishō vol. 4, no. 201, 281a2)と言及され、生天についての内容が説話の素材として議論される。

れないが、説話の素材の背景にインド文化が明確に存在していることは、両作品に共通の特徴と言えよう。

漢訳『大荘厳論経』に北西インドの地名や人名がみられることには、既に Lévi [1896][1897a][1897b]が注目しており、第 14 話と第 31 話に Kaniṣka 王が登場する[41]。Lüders による Kalpanāmaṇḍitikā のサンスクリット写本の発見によっても、第 31 話の Kaṇiṣka の名前が確認されている[42]。前項でも述べたように、『Kumāralāta 説話集』でも断片 A49 は Kaniṣka 王による仏教僧院の再建を物語っている。断片 A49 の内容は Kalpanāmaṇḍitikā の Kaniṣka 王説話とはそのままは一致していないが、王が再建した僧院が Puṣyamitra 王によって破壊されたものであることに言及することなどから[43]、著者がある程度北西インドの状況──それが伝説であるにせよ──に通じていたであろうことが窺われる。このことはさらに、ガンダーラに言及することによっても裏付けられよう。すなわち、A53 は非常に小さな断片であるが、ガンダーラの形容詞形 (gāndhārṣinäśśi, A53b5)が残っている。『大荘厳論経』はガンダーラの商人の説話で第 1 話が始まっており[44]、仏塔の供養を讃えるのみならず、ガンダーラの語の通俗語源解釈にも言及して[45]、ガンダーラを称賛している。これに対応する Kalpanāmaṇḍitikā の第 1 話の断片にも Gāndhāraka の語が残っている[46]。ガンダーラの他にも北西インドの地名がいくつか指摘されているが[47]、

---

[41] 栴檀罽尼吒王 (Taishō vol. 4, no. 201, 272a19); 眞檀迦膩吒 (287a23); 伽膩吒王 (287c7). 『雑宝蔵経』第 93–94 話にも Kaniṣka 王が登場する(月氏國有王。名栴檀罽尼吒 Taishō vol. 4, no. 203, 484a12, 484b16; 月氏國王。名栴檀罽尼吒 484a18–19).

[42] Lüders [1926], p. 67: 断片*111V5 を(ku)latilak(aka)ṇi(ṣk)e(ṇa)または(ku)latilak(e ka)ṇi(ṣk)e と復元している。

[43] 前掲注 16 参照。

[44] 乾陀羅國 (Taishō vol. 4, no. 201, 257a19).

[45] 健陀羅者名不虚設。言健陀者。名爲持也。持善去惡故得斯號 (Taishō vol. 4, no. 201, 258b13–15).

[46] gāndhāraka ity avitathārthānīmāny akṣarā(ṇi), KalpM *6R3; (sa)dbhiḥ proktā gāndhārak(āḥ), KalpM *7V1.

[47] Lüders [1926], pp. 65–67 参照。

Lüders も指摘しているように、Kumāralāta が北西インドで活躍したことを考えれば十分説明がつく[48]。『大荘厳論経』には Kaniṣka 王の他にも無名の王の説話がいくつかあるが、おそらく地域に知られていた王の名前ではないかと推測される。トカラ語断片 A49 には Kaniṣka 王の他にも王の名前が言及され(śpeśuy lānt, A49b4)、śp という音がガンダーラ語である可能性が考えられるが、これに関しては今後さらに検討する必要がある。

5. 小結

以上の考察から、『Kumāralāta説話集』の特徴について以下のように要約することができよう。

まず、説話集はcampūスタイルと呼ばれるkāvyaの技法で書かれており、韻文と散文が交替する。散文から韻文に交替する際には導入表現が用いられる場合と用いられない場合があり、KumāralātaのKalpanāmaṇḍitikāのように導入表現を伴うスタイルと、ĀryaśūraのJātakamālāのように導入表現を伴わずに自由に交替するスタイルとの、過渡的なスタイルを示している。説話の始め或いは章の始めには、そのテーマが述べられ、tadyathānuśrūyateの定形句で物語が始まるのは、KalpanāmaṇḍitikāやJātakamālāと共通する形式である。

次に、説話集は比較的長いいくつかの章によって構成されていたと推測され、章ごとのテーマにそって、いくつかの説話が続けて語られ、それぞれの説話に経典からの引用や他の物語が組み込まれ、教義的な内容も文学的に豊かに表現されている。それぞれの説話は注釈で繋がれており、そこではアビダルマ的な内容が説かれる。作者がアビダルマに精通していたことが知られる。

説話の素材にはKalpanāmaṇḍitikāおよびそれに対応する『大荘厳論経』と共通する内容がみられる。新たにŚroṇa Koṭikarṇaの説話が同定されたが、『大荘厳論経』に収録されているものとは異なったヴァージョンである。地理的歴史的な語彙も両作品で共通しており、Kaniṣka王やガンダーラに

[48] Lüders [1926], pp. 65–67 参照。

言及することから、北西インドのクシャーナ朝の文化を背景としていることが知られる。また、仏教に限らず広くインド文学の知識があることも両作品に共通している。

以上のような特徴は、この説話集が北方の名僧Kumāralātaの作品であることを、その名前の言及に加えて、さらに裏付けるものと言えよう。

略 号

BHSD: Franklin Edgerton: *Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar and Dictionary.* Vol. II: Dictionary. New Haven 1953.

CEToM: A Comprehensive Edition of Tocharian Manuscripts, https://www.univie.ac.at/tocharian/または https://cetom.univie.ac.at/tocharian/

GM: *Gilgit Manuscripts*, ed. Nalinaksha Dutt, Srinagar, 1939–59.

IKJ: 赤沼智善『印度佛教固有名詞辞典』京都（法蔵館）1931.

KlpM: Kalpanāmaṇḍitikā, ed. Lüders [1926].

Taishō: 大正新脩大蔵経

参考文献

Chojnacki, Christine [2008]: *Kuvalayamālā. Roman jaina de 779, composé par Uddyotanasūri*. vol. I: Étude. (Indica et Tibetica 50,1). Marburg: Indica et Tibetica Verlag.

Dschi, Hiän-lin [Ji, Xianlin] [1943]: Parallelversionen zur tocharischen Rezension des Punyavanta-Jātaka. in: *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft* 97, pp. 284–324.

Grünwedel, Albert [1912]: *Altbuddhistische Kultstätten in Chinesisch-Turkistan. Bericht über archäologische Arbeiten von 1906 bis 1907 bei Kuča, Qarašahr und in der Oase Turfan*. Berlin: Reimer.

幅田裕美 [2022]: 「『機械仕掛けの少女の説話』の仏教化 — Kumāralāta の Jātaka/Avadāna 集」『国際仏教学大学院大学研究紀要』26, pp. 1(202)–17(186).

Hahn, Michael [1982]: Kumāralātas Kalpanāmaṇḍitikā Dṛṣṭāntapaṅkti. Nr. 1 Die Vorzüglichkeit des Buddha. in: *Zentralasiatische Studien* 16, pp. 309–336.

Hahn, Michael [1992]: *Haribhaṭṭa and Gopadatta. Two authors in the succession of Āryaśūra on the rediscovery of parts of their Jātakamālās*. Second edition thoroughly revised and enlarged. (Studia Philologica Buddhica. Occasional Paper Series 1). Tokyo: The International Institute for Buddhist Studies.

平岡聡 [2007]: 『ブッダが謎解く三世の物語　『ディヴィヤ・アヴァダーナ』全訳　上』東京（大蔵出版）。

Hofinger, Marcel [1954]: *Le congrès du Lac Anavatapta (Vies de saints bouddhiques): Extrait du Vinaya des Mūlasarvāstivādin Bhaiṣajyavastu*. I: Légendes des Anciens (Sthavirāvadāna). (Bibliothèque du Muséon 34). Louvain: Institut Orientaliste.

Huber, Édouard [1908]: Açvaghoṣa Sūtrālaṃkāra. Traduit en Français sur la version chinoise de Kumārajīva. Paris: Ernest Leroux.

井ノ口泰淳 [1961]: 「トカラ語及びウテン語の佛典」西域文化研究会編『中央アジア古代語文献　西域文化研究第四』京都（法蔵館）、pp. 318–388.

加藤純章 [1989]: 『経量部の研究』東京（春秋社）。

Kulke, Hermann & Rothermund, Dietmar [1998]: Geschichte Indiens. von der Induskultur bis heute. Zweite, verbesserte und aktualisierte Auflage, München: Beck.

Lévi, Sylvain [1896]: Notes sur les Indo-Scythes. *Journal Asiatique* série 9. tome 8, pp. 444–484.

Lévi, Sylvain [1897a]: Notes sur les Indo-Scythes. *Journal Asiatique* série 9. tome 9, pp. 5–42.

Lévi, Sylvain [1897b]: Note additionnelle sur les Indo-Scythes. *Journal Asiatique* série 9. tome 10, pp. 526–531.

Lévi, Sylvain [1908]: Açvaghoṣa, le Sūtrālaṃkāra et ses sources. *Journal Asiatique* série 10. tome 12, pp. 57–184.

Lüders, Heinrich [1926]: *Bruchstücke der Kalpanāmaṇḍitikā des Kumāralāta*. (Kleinere Sanskrit-Texte II). Leipzig: Deutsche Morgenländische Gesellschaft.

Sieg, Emil [1916]: Die Geschichte von den Löwenmachern in tocharischer Version. in: *Aufsätze zur Kultur- und Sprachgeschichte vornehmlich des Orients: Ernst Kuhn zum 70. Geburtstage am 7. Februar 1916; gewidmet von Freunden und Schülern*. Breslau: Marcus, pp. 147–151.

Sieg, Emil [1944]: *Übersetzungen aus dem Tocharischen I*. (Abhandlungen der Preußischen Akademie der Wissenschaften, Jahrgang 1943. Phil.-hist. Klasse, Nr. 16). Berlin: Verlag der Akademie der Wissenschaften.

Sieg, Emil [1952]: *Übersetzungen aus dem Tocharischen II*. Aus dem Nachlass herausgegeben von Werner Thomas. (Abhandlungen der Deutschen Akademie der Wissenschaften zu Berlin, Klasse für Sprachen, Literatur und Kunst, Jahrgang 1951 Nr. 1). Berlin: Akademie-Verlag.

Sieg, E. & W. Siegling [1921]: *Tocharische Sprachreste*. I. Band: Die Texte. A. Transcription. Berlin: Vereinigung wissenschaftlicher Verleger.

Waldschmidt, Ernst [1952]: Zur Śroṇakoṭikarṇa-Legende. Nachrichten der Akademie der Wissenschaften in Göttingen. I. Philologisch-Historische Klasse, Jahrgang 1952 Nr. 6, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, pp. 129–151.

八尾史 [2013]:『根本説一切有部律薬事』東京（連合出版）。

＜キーワード＞
トカラ語、Kumāralāta, Jātaka/Avadāna, Kalpanāmaṇḍitikā, 大荘厳論経

（2021–2025 年度　科学研究費補助金・基盤研究（B）「トカラ語仏教圏におけるジャータカ・アヴァダーナの伝承の学際的研究」の研究成果の一部）

Summary

Structure and Characteristics of the Jātaka/Avadāna Collection of Kumāralāta Transmitted in Tocharian A

Hiromi HABATA

The author of the Jātaka/Avadāna collection transmitted in Tocharian A could be attributed to Kumāralāta as argued in my paper "The Buddhification of the 'Mechanical Girl' Tale in a Jātaka/Avadāna Collection in Tocharian A: Possible Clues for Attributing Its Authorship to Kumāralāta" (*Journal of the International College for Postgraduate Buddhist Studies*, 26. 2022, pp. 1–17). The manuscript of this collection has been discovered among the Šorčuq remains. To be more precise, it contains 53 fragments, most of which are heavily damaged except for some well-preserved parts. This paper looks at the structure and characteristics of these fragments.

The title of the collection should have been written on the first folio of the manuscript, but unfortunately it is illegible and can be found nowhere else in the fragments. The fragmentary verses at the beginning of the text suggest that they praise the deeds of the bodhisattva, so they fit the opening verses of a typical Jātaka/Avadāna collection. After the opening verses, the first story begins with the formula *tadyathānuśrūyate* (*täm mäṃtne klyosnäṣträ* in Tocharian A), before which a subject of the story (as well as probably of that of the chapter) is mentioned.

The highly elaborated literary text is written in the *campū* style, in which verse and prose alternate. Before changing from prose to verse, the text uses introductory phrases such as "he says", "why", or "how it is?", which agrees with a similar usage in the *Kalpanāmaṇḍitikā* of Kumāralāta.

There are also places in which the prose changes into verse without any introductory phrases. Such a style is, however, also found in, for instance, the *Jātakamālā* of Āryaśūra.

Since the name of the author, i.e. Kumāralāta, is mentioned in the colophon of a chapter, the collection is supposedly divided into different chapters arranged according to their subjects. The first story deals with the worship of the stūpa(s) of the Buddha(s). The fragment containing the words 'Kaniṣka' and 'Puṣyamitra' could actually belong to this chapter. Another chapter seems to deal with the teaching of *karman* and *phala*, in which I could identify fragments of the Śronakoṭikarṇa legend. The well-preserved fragments that include the Puṇyavanta and Bṛhaddyuti stories may have belonged to a chapter dealing with the subject *puṇya*.

The collection shows characteristics common with the *Kalpanāmaṇḍitikā*. Both texts often contain the same motifs such as, for example, the "mechanical girl", which is connected with the teaching of *anātman*. The famous Indian epics the *Mahābhārata* and the *Rāmāyana* also seem to play the role of a common background for both works. Geographical and historical references, such as Kaniṣka and Gāndhāraka, suggest that both texts were related to the Kushan Dynasty in the North of India, where Kumāralāta was also active.

Professor,
International College
for Postgraduate Buddhist Studies